

Ohne mach Books 遊びの社会学

——トニー・カーテン著

「傘がない」のなかで、社会生活と私的生活とはコロイドリアリティとして対置されている。傘がない。社会生活は、新聞やテレヴィジョンが伝えるロジックであり、ひとはそれを間接的にしか体験することができない。直接的に体験しうるリアリティは、私的生活である。社会生活のロジックをとねじり、そのアリティを見るためには、一定の訓練が必要である。その訓練は青年期にいるものであつて、終つているのではない。かれが私的生活においてほん心を奪われていて、それは咎められるべきものではない。

田嶺也

欠落と豊饒の世界

——井上陽水「傘がない」に答えて

傘がない

都会では血殺つい若者が増えた
今朝見た新聞の片断に載じていた

だけといふ問題は今日の雨 傘がない

君の家に行かなくちゃ 傘はない
行かなくちゃ 雨に逢いに行かななくちゃ
君の町に行かなくちゃ 傘はない

つめたい雨が今日は心に残る
雨の事以外は考えられなくな
それはじい事だな。

傘がない 雨に逢いに行かななくちゃ
いぬだい雨が僕の頭の中に残る
雨の事以外は何も見えなくなる
それはじい事だら。

この作品の全体をみると、そこには、かなり見えやすくなっている、社会生活と私的生活の対置の圖式がみえた。されば、傘がない

社会生活は各節の冒頭の一節に示される。それは、都會における若者たちの血殺の増加であり、新聞が伝えたものである。あることは、我が将来の問題であり、テレヴィジョンが深刻な顔の人ひととよいで語られるのである。これだからする私的生活は、恋愛との存在であり、彼女に逢うにあらゆる気持であり、雨が降つているのに傘がないこと、こうした状態である。社会生活と私的生活があつたそれで対置され、作品のなかの主人公は私的生活にいる間心をよせつづるとなつた。

傘がない

1970年代に入り、学生運動が終焉して、若者の闘争が社会的なことから私的なこと（恋愛や自分の心理）に移ってきたという分析である。

授業では、彼は君（彼女）に会いに行くのか？「君」や「雨」や「傘」は何を象徴しているのか？という、ビデオで盛り上がった。そこで、「今度カラオケで歌つたら」と言つたら、「こんな暗い歌、歌つたら、友達から何があつたのと心配されます」との返事。やはり、昔の歌は、時代遅れなのか。

わが主人公は「問題は今日の雨」という。昨日でも明日でも「雨の家」「雨の街」のむけたの距離として存在する。端的といえば、時間はなくて、空間のみがある世界。騎士たちは、今日の闘争と破壊のみに関心をかたむけ、昨日までの歴史も、明日かのアロクラムも無視し、ひがのまの解放区やバリケードに執着した。その世界にも、時間はない、空間のみがあった。

本題ともどいし、しらべられた。

「傘がない」のなかの私的生活／の闘争などのよつたな性質のものか。されば、雨が降り傘がないという条件のもとで、恋愛とのよつたなよなべつた。とおもつては状況である。この状況の意味について、私はいつも複数的じうたのだが、君の同僚や大学院の女性学生の精神であつた。かれらは、當然な恋愛をしてはならないが、雨が降つたが、傘がないのが、恋愛との訴えか、恋愛の話か。それが、君の話か、君の話か。

そもそもこの話はある人を介して持ちこまれたものだが、浜崎あゆみの歌の詞と私の写真とを署名入りで組み合わせてポスター・ビルボードの看板などを作りたいという話があった時点では、私は彼女のことをよく知らないかった。というより写真を見せられて、サイボーグのようなその姿から、プロデューサーによって作られた單なるお人形さんとしか思えず、最初は断った。しかし一九八〇年代の半ばに『乳の海』という本のなかで、山口百恵と松田聖子という二人のアイドルを七〇年代が八〇年代に移り変わる風景としてかなりのページを翻いて書いている私としては、九〇年代の時代風景を映すアイドルであるらしい彼女のことが心の片隅で気になつたことも確かである。そして置かれていたCDで彼女の歌を聴いた。

その結果、これが予想を裏切つて私の彼女に対するイメージは一変してしまつた。あの音怒良晴は吉風とさえ言えるスタンダードな詞を書き、歌つているのである。私はそんな彼女の外面も内面の断絶と落差に、何か九〇年代という時代の匂いをひと嗅いだような気がした。

たとえばそれは彼女の書いたたくさん詞のなかの一例なのだが、彼女がリリースした「Dロトマ」というアルバムの一節にこんな詞がある。(「Dロトマ」)

誰もが探して 欲しがつているもの

「それ」はいつかの 未来にあると
僕も皆も 思い込んで いるよね

なのになまざか過去にあるだなんて
一体どれほどの人間 気付けるだなんて
予想もつかない

この詞はあきらかに近代以降、人間が抱えこんだスタンダードな病であり、人生のテーマでもある「モラトリアム」が歌われている。子供時代が過ぎ去り、大人の領域に踏みこむ時のあの不安と迷走。かつて「未来」というものを幻想できた、のどかなあの時代、大人の世界に踏みこむことは誰にとっても喜びであり胸がワクワクする出来事だった。しかし高度成長がピーダに達し、

この詞はあきらかに近代以降、人間が抱えこんだスタンダードな病であり、人生のテーマでもある「モラトリアム」が象徴するようだ。時代の、そして個人の未来化し、成熟としての身体や文化がこの社会の中核を作りつつある。

「少女」ととって世界の中心であるその幼麗といふ繊から出なければならない年齢に達するところとは、ニデンの闇からの追放なのである。彼女は歌う。

気がつけば自分が別れを告げようとしている無意識の時代(幼年期や少年期)にこそ「愛」の蜜月はあったのではないか。「次が自分の番だってことは知りたくないんだ」と。そんな

六〇年代学生闘争が霧散したのち、若者の間に足踏み(モラトリアム)がはじまる。そしてやがてさらに年月を重ねた九〇年代。「ひきこもり」が象徴するようだ。時代の、そして個人の未来化し、成熟としての身体や文化がこの社会の中核を作りつつある。

「少女」ととって世界の中心であるその幼麗といふ繊から出なければならない年齢に達するところとは、ニデンの闇からの追放なのである。彼女は歌う。

気がつけば自分が別れを告げようとしている無意識の時代(幼年期や少年期)にこそ「愛」の蜜月はあったのではないか。「次が自分の番だってことは知りたくないんだ」と。そんな

抵抗の快樂 ボンバー・カルチャーの記述譜

ジョン・フライスク
山本雄一 訳

マドンナ

READING THE POPULAR ...

マドンナは極端に多くの宝石を身につけ、濃いめのメイクをして、がらくたっぽいものを身につけることによって、パロディによって得られるのと同じ視点を読者に与える。極端さによってわれわれはそのイデオロギー性に気がつくようになるのである。すなわち、塗りたくった口紅は意にきらんと彩られた唇が男性社会においてもつてゐる意味をあらためて考えさせることになり、宝石をじやらじやら身につけることは逆に男性社会における女性の装飾品の役割に疑問をつきつける。ものごとの極端さはイデオロギー的管理の枠からあふれ出て、抵抗への入り口を用意するのである。こうして、マドンナのセクシーナ唇のつき出しかたや派手な口紅、男性社会によって押しつけられたからではなく、彼女が意図的に選択したものだというメッセージとして読むことができる。また、宗教的イコンを身につけるのも宗教的な名を名乗るのも、男性社会(そして資本主義社会)におけるキリスト教の役割を支持したり、攻撃したりするためではなく、それがただ美しい、セクシーな装飾品だからにすぎない。マドンナ

は、男性社会のシンボル体系を自分流に解釈し、男性社会の既成の記号表現(signifier)を使いながら男性中心の記号内容(signified)を拒絶し、あざけり笑うことや、女性も自分で自分らしく生きることができるのだということを実証してみせていくのである。

～ラブソングに見られる女性心理の変化について～

(上巻大學生レポート)

1980年代、女性デュオ「あみん」の歌う『待つわ』という曲が多く恋する女性の心をつかみ大ヒットした。サビの歌詞は以下のようにになっている。

私 待つわ いつまでも待つわ
たとえあなたが ふり向いてくれなくとも
待つわ (待つわ) いつまでも待つわ
他の誰かに あなたがふられる日まで

この歌の主人公は好きな相手のことだけを想い、ひたすら「待つ」姿勢でいる。大変いじらしく、片想いをしている女性なら誰しも共感できるであろう。が、昨今では極めて珍しい「純愛」を描いたもので、「元祖ストーカーの歌」と呼ばれる意味も理解できる。

何故 知りあつた日から半年過ぎても
あなたって手も握らない
I will follow you あなたに ついてゆきたい

こちらも1980年代にヒットした「松田聖子」が歌う『赤いスイートピー』の歌詞の一部だ。好きな彼が手を握ってくれるのを「待つ」。ひたすら、半年間も待っているのだ。『待つわ』で印象的なのもこのような女性の待つ姿勢である。極めつけは、授業でも取り扱った「かぐや姫」の歌う『神田川』である。

二人で行った 横丁の風呂屋 一緒に出ようねって 言つたのに
いつも私が 待たされた 洗い髪が芯まで 冷えて

こちらは1970年代のヒット曲だが、待つ姿勢もここまでいくと献身的という表現を超えて自虐的な行為に見えてくる。「彼を待たすまい！」という気持ちが強いからか、自分の髪を乾かすことよりも、彼女は「待つ」ことを優先させた。そもそも、この「風呂屋と一緒に行く」という設定がピンとこないし、電車の中でさえ鏡をのぞきこみ、化粧やヘアスタイルをととのえることを大事にする現代女性には別世界のことのように思えるのではないだろうか。少なくとも、私は「石鹼がカタカタ鳴る」まで女を待たせるような長風呂の男、その上、その女の「身体を抱いて 冷たいね」と、他人事のように言い放つ男は嫌だ。たとえ大好きな相手だとしても許せる自信がない。

70～80年代に流行ったこの3曲に共通して言える特徴は、男性が女性より上に位置し、憧れや理想といった存在、ということだ。女性から何かアクションを起こすことは「美」とされていなかったのだろうか。「待つ」、「つくす」、「男の後をついていく」といったタイプの女性が普通で、望まれる男と女の形だったのかもしれない。

時は経ち、好きな男性に対する女性の姿勢も変わった。

受話器握りしめて 彼にダイアルした 友達以上になれるかな?
本気で恋したいから 今も大事なひとだから
勇気を出して飛び込もう この距離が近づくように

これは1990年代に「Every Little Thing」が歌った『SHAPES OF LOVE』の歌詞の一部である。先にあげた3曲よりも女性は恋に積極的になっているように見える。好きな人だからこそ、待ってはいられないのだ。

何にもしなきゃ何にもならない
自分の心にフィルターはいらない

こちらは「矢井田瞳」の歌う『My Sweet Darlin』の歌詞の一部、2000年の作品だ。もちろん、これは恋愛をテーマにした曲であり、「恋愛に対し積極的に行動しよう！」という女性への応援歌という意味合いもあるのだろう。

(以下略)